

程度の判断基準から見た 「かなり」類と「少し」類の違い

疏 蒲劍

◆要旨

程度副詞「かなり」と「少し」は「太郎は {かなり/少し} 酒を飲んだ」ではともに飲酒量を限定することができるが、比較構文の「太郎は次郎より {かなり/?少し} 酒を飲んだ」では「かなり」は言えるのに対し、「少し」は不自然に感じられる。分析の結果、「かなり」類と「少し」類は程度の判断基準が異なることが分かった。すなわち、「かなり」類は比較差の程度が「通常程度」の基準を上回ったことを表すのに対し、「少し」類は比較差が0の基準からずれることを表すという違いがある。また、「かなり」類では「多く」といった副詞的成分が喚起されるのに対し、「少し」類ではそれが喚起されない。そのため、この2種類の程度副詞が比較構文において許容度に違いが現れている。

◆キーワード

程度副詞、比較構文、判断基準、程度性、喚起

◆ABSTRACT

In the sentence “tarou wa {kanari/sukoshi} sake o nonda”, both the degree adverbs “kanari” and “sukoshi” can be used to determine the amount of beer being drunk. In the comparative sentence “tarou wa jirou yori {kanari/?sukoshi} sake o nonda”, however, it seems unnatural to use “sukoshi”. The analysis in this paper points out that there exists differences between “kanari” class and “sukoshi” class according to various criterion for judgment about degree. That is, “kanari” class expresses the comparison difference that is more than the normal standard while “sukoshi” class expresses the comparison difference that is not zero. Moreover, “kanari” class has the ability to evoke the adverb element such as “ooku” while “sukoshi” class does not. In short, the two classes have different acceptable level when being used in the comparative sentences.

◆KEY WORDS

Degree Adverb, Comparative Sentence, Criteria for Judgment, Gradable, Evoke

The Difference between “*kanari*” Class and “*sukoshi*” Class from the View of the Criterion for Judgment about Degree

PUJIAN SHU

1 はじめに

副詞「かなり」と「少し」は次の(1a)では状態を表す形容詞「高い」を修飾して「高い」の程度を限定し、(1b)では「酒を飲んだ」を修飾して飲んだ酒の量や時間などを限定している。

- (1) a. この酒は {かなり/少し} 高い。
- b. 太郎は {かなり/少し} 酒を飲んだ。

「かなり」と「少し」は(1)では値段や飲酒量を限定しているのに対して、次の(2)では値段の差や飲酒量の差を限定している。しかし、(2)の場合、「かなり」と「少し」には許容度の違いが見られる。(2a)では「かなり」と「少し」はともに「高い」を修飾することができるのに対して、(2b)では「かなり」は自然なのに「少し」は不自然に感じられる。しかし(3)のように「多く」を入れると、「少し」も言えるようになる。この現象は「かなり」と「少し」の意味が違うことを示唆している。

- (2) a. この酒はその酒より {φ/かなり/少し} 高い。
 - b. 太郎は次郎より {?φ/かなり/?少し} 酒を飲んだ。
 - (3) 太郎は次郎より {φ/かなり/少し} 多く酒を飲んだ。
- (φは副詞を用いない場合、以下同じ)

「かなり」類の副詞には(4a)のような副詞、「少し」類の副詞には(4b)のような副詞が挙げられる。

- (4) a. 太郎は次郎より {かなり/ずいぶん/相当/だいぶ} 酒を飲んだ。
- b. 太郎は次郎より? {少し/ちょっと/多少/少々/いささか} 酒を飲んだ。

佐野(2008)はこの現象に触れているが、その理由については示していない。本稿ではこの2種類の程度副詞の許容度の違いを考察し、その理由が程度の判断基準にあることを指摘する。

2 先行研究の概観と本稿の立場

「かなり」類は高い程度を表し、「少し」類は低い程度を表すという違いが見られるが、被修飾成分や出現する構文の特徴において一致するところが多い。以下、先行研究を概観した上で、本稿の見解を述べる。

2.1 被修飾成分と構文特徴の類似性

森山(1985)や仁田(2002)は「非常に {おいしい/*酒を飲んだ}」のように動作や対象の数量を修飾することができない程度副詞を「純粋程度の副詞」、「{かなり/少し} {おいしい/酒を飲んだ}」のように数量を修飾することができる程度副詞を「量程度の副詞」としている。本稿で言う「かなり」類と「少し」類は数量を修飾することができるので、ともに「量程度の副詞」に分類される。このように「かなり」類と「少し」類は統語的な特徴が類似しているということが分かる。

また、「かなり」類と「少し」類は構文の特徴においても類似性が見られる。渡辺(1990)は文を比較構文(XはYより<程度副詞>A; XとYは名詞句、Aは形容詞、以下同じ)と計量構文(Xは<程度副詞>A)に分け、程度副詞を比較構文にだけ現れるかどうか、計量構文にだけ現れるかどうか、比較構文と計量構文の両方に現れるかどうかという基準で分類している。

表1 渡辺(1990:13)の程度副詞の分類

分類	比較構文	計量構文	その他の語例
「とても」類	×	○	甚だ、すこぶる、大変、極めて、非常に、ずいぶん
「結構」類	×	○	なかなか、わりに、ばかに、やけに
「多少」類	○	○	少し、ちょっと、やや、いささか、かなり
「もっと」類	○	×	ずっと、よほど、一層、遥かに、一段と

渡辺 (1990) の分類は佐野 (1998) や陳 (2010, 2015) に受け継がれている。佐野 (1998) は渡辺 (1990) の言う「もっと」類と「多少」類についてさらに考察し、下位分類を設定している。陳 (2010) は佐野 (1998) で同じ種類とされている「もっと」と「さらに」の意味の違いについて考察し、陳 (2015) は渡辺 (1990) と佐野 (1998) の見解を踏まえ、日本語と中国語における比較と関わる程度副詞について体系的に対照研究を行っている。これらの研究はいずれも「かなり」類と「少し」類が同様に比較構文に現れることに触れている。

ここまで述べてきたように「かなり」類と「少し」類は被修飾成分と構文的特徴において類似している。しかし本稿の1節で示したように両者は比較構文において許容度の違いが見られるため、これについて別の視点から考える必要がある。以下、程度副詞が用いられる判断基準という視点から解決を試みる。

2.2 程度副詞の判断基準

本項では程度副詞が比較構文で用いられる判断基準について論じる。次の(5)を例として考察する。この場合、話し手は比較対象(=この酒)の値段を比較基準(=その酒)の値段と比べ、その比較差(=この酒の値段-その酒の値段)について程度を判断している。この場合の判断基準を図1のようにする。

- (5) a. この酒はその酒より { ϕ /かなり/少し} 高い。
 b. この酒はその酒より { ϕ /かなり/少し} 安い。

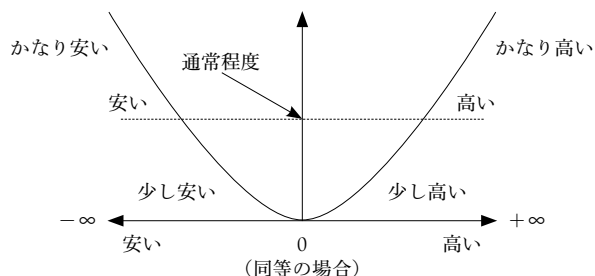


図1 程度副詞の判断基準 (比較構文の場合)

図1の曲線は「程度副詞+述語」の意味を示している。横軸は比較差(=無限大から無限大までの開区間)を示し、比較差が0より大きい場合(この酒の値段>その酒の値段)は「高い」の領域に入り、比較差が0より小さい場合(この酒の値段<その酒の値段)は「安い」の領域に入る。縦軸は比較差の程度を示している。「かなり」類は比較差の程度が話し手の想定した「通常程度」を超えた場合に用いられ、「少し」類は比較差が0から若干離れた場合に用いられる。これをまとめると次の(6)のようになる。

(6) <比較構文における程度判断基準>

- 「かなり」類：比較差の程度を「通常程度」の基準と比べる。
 「少し」類：比較差を0の基準と比べる。

3 「かなり」類と「少し」類の違い

安達 (2001: 4) は典型的な比較構文について「構文の成立にとって比較述語に必要となる意味特徴は、2つの要素の間で上下、優劣がつけられるという程度性や相対性を持っているということである」と述べている。これは次の(7)で検証できる。「かわいい」と「背が高い」は程度性を持っているので比較述語として適格であるが、「酒を飲んだ」は程度性を持たないので「?太郎は次郎より酒を飲んだ」は成り立たない^[註1]。しかし(8)の「酒を飲んだ」は「かなり」に修飾されると、程度性がないものの比較構文として自然である。

- (7) 太郎は次郎より {かわいい/背が高い/?酒を飲んだ}。
 (8) 太郎は次郎より かなり酒を飲んだ。

ここで考えられる理由は、(8)の「かなり」にはすでに程度性が含まれているということである。すなわち(8)の「かなり」は(9a)の「かなり多く」あるいは(9b)の「かなり {頻繁に/長く}」の意味で理解され、(9c)の「かなり {少なく/早く}」の意味では理解されない。

- (9) a. 太郎は次郎よりかなり多く酒を飲んだ。
 b. 太郎は次郎よりかなり {頻繁に／長く} 飲んだ。
 c. 太郎は次郎よりかなり {少なく／早く} 酒を飲んだ。

(9a) と (9b) の読みに共通する点は太郎の飲酒量が次郎の飲酒量を上回ったということである。一方、(9c) の「少なく」は太郎の飲酒量が次郎の飲酒量より少ないことを意味し、「早く」も一定の酒を飲むための所要時間において太郎が次郎より少ないことを意味している。

一方、「少し」類は次の (10a) のように直接「酒を飲んだ」を修飾すると不自然に感じられる。佐野 (2008:7) にも指摘があるように、「少し」を用いるには、(10b) のように「多く」、「長く」、「たくさん」といった副詞的成分を入れる必要がある。

- (10) a. ?太郎は次郎より少し酒を飲んだ。
 b. 太郎は次郎より少し {多く／長く／たくさん} 酒を飲んだ。

このように、「かなり」類と「少し」類が比較構文で程度性のない述語を修飾する場合、「かなり」類は程度性を表す副詞的成分を明示する必要がないのに対し、「少し」類はそれを明示する必要があるという違いが見られる。

本稿は「かなり」類と「少し」類の判断基準の違いが比較構文に用いられる適格性に影響を与えていると考える。「かなり」類は比較構文に現れた場合、比較差の程度が「通常程度」の基準を上回ったということを含意している。「多く」といった副詞も、比較対象の量が比較基準の量を上回ったことを含意している。「かなり」類と「多く」はある基準を上回ったという点において類似性があるため、「かなり」類によって比較構文の述語に「多く」などが喚起されやすいのである。一方、「少し」類は単に比較差が0の基準から少し離れていることを表し、基準を上回ったという含意はないため、「少し」類によって「多く」が喚起されにくい。したがって、比較構文では「かなり」類は程度性のない述語と共起できるのに対し、「少し」類はそれと共起しにくいのである。

4 おわりに

本稿は「かなり」類と「少し」類の程度副詞が比較構文に用いられた場合、判断の基準が異なるため、比較構文における許容度に違いが見られると主張する。「かなり」類が用いられている場合、「たくさん」や「多く」といった副詞が喚起されるため、程度性のない述語も比較構文に用いることができる。一方、「少し」類の場合、「たくさん」や「多く」といった副詞が喚起されないため、程度性のない述語は比較構文に用いられにくい。程度判断の基準は「かなり」類と「少し」類だけでなく、程度副詞全体に共通する性質であると考えられる。これについては今後の研究で射程を広げて検証したい。 (名古屋大学大学院生)

注

[注1] ……「太郎は次郎より酒を飲んだ」が許容できるという母語話者もいるが、それは心の中で「多く」を言っているためである。

参考文献

- 安達太郎 (2001) 「比較構文の全体像」『広島女子大学国際文化学部紀要』9, pp.1-19. 県立広島女子大学
 佐野由紀子 (1998) 「比較に関わる程度副詞について」『国語学』195, pp.1-14. 国語学会
 佐野由紀子 (2008) 「「程度差」「量差」の位置づけ—程度副詞の体系についての一考察」『高知大国文』39, pp.1-12. 高知大学国語国文学会
 陳建明 (2010) 「「もっと」と「さらに」の意味内容の違いについて」『言語文化研究 (言語情報編)』5, pp.91-104. 大阪府立大学人間社会学部言語文化学科
 陳建明 (2015) 「日本語と中国語の比較に関わる程度副詞の分類について」『人文学論集』33, pp.203-211. 大阪府立大学人文学会
 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
 森山卓郎 (1985) 「程度副詞と動詞句」『京都教育大学国文学会誌』20, p.60-65. 京都教育大学国文学会
 渡辺実 (1990) 「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』23, pp.1-16. 上智大学

